

慶應義塾大学大学院社会学研究科 2017（平成 29）年度博士論文

近代的時間の社会学 要約

鳥越信吾

目次

序論

- 1 問題の所在——社会学における時間の問題
- 2 本論文の目的
- 3 時間カテゴリの豊穰化によって何が明らかになるか——「近代的世界像」の問題
- 4 本論文の構成

第1部 「近代的时间」の社会学的研究

第1章 「時間の社会学」の歴史的展開

- 1-1 「絶対時間」との対決——一九世紀後半から二〇世紀初頭の哲学
- 1-2 時間の社会学の成立——質的な時間の探究
- 1-3 時間の社会学の展開——「統合的な社会理論」の時代
- 1-4 近代的时间の諸性格
- 1-5 二つの近代的时间論と真木悠介の四象限図式

第2章 近代的时间の変容——ハルトムート・ローザの加速化論

- 2-1 ローザの立場
- 2-2 加速化論の基本的視角
- 2-3 現代社会における近代的时间——近代的时间の第四の性格としての「流れ去る」性格

第3章 真木悠介の近代的时间批判——もう一つの時間の比較社会学

- 3-1 はじめに
- 3-2 第一の比較社会学——抽象性と不可逆性
- 3-3 第二の比較社会学——時間のニヒリズム
- 3-4 もう一つの比較社会学——積み重なる時間

- 3-5 「天空の地質学」への展開——『宮沢賢治』の時間論
- 3-6 横の比較社会学と縦の比較社会学
- 第4章 第一部の結びにかえて——「流れ」のメタファーの問題

第2部 「垂直に積み重なる時間」の社会学的・現象学的研究

第5章 シュッツ社会理論における時間論の位置づけ

- 5-1 『意味構成』第二章における孤独な自我の構成分析
- 5-2 『意味構成』第三章における他者理解論
- 5-3 「同時性の理路」と「自己解釈の理路」
- 5-4 「自己解釈の理路」におけるふたつの過去
- 5-5 反省とレリヴァンス——前述定的領域の先構造化
- 5-6 小括——時間論を基底にもつシュッツ社会理論

第6章 シュッツにおける「垂直に積み重なる時間」

- 6-0 はじめに
- 6-1 「垂直に積み重なる時間」における過去
- 6-2 「垂直に積み重なる時間」における未来
- 6-3 「垂直に積み重なる時間」における現在
- 6-4 小括

第7章 シュッツにおける社会的世界の時間的構成

- 7-1 社会的世界論の概要
- 7-2 通常の諸社会的世界の相互関係
- 7-3 社会的世界の時間的構成
- 7-4 地平的な諸社会的世界の相互関係

結論

- 1 「垂直に積み重なる時間」にもとづく世界像は何を捉えうるか
- 2 本論文のまとめと成果、課題

初出一覧

文献

謝辞

序論

本論文の出発点は、社会学においていまだ「時間」という主題が十分には探究されていないということ、そしてこの問題が、社会学におけるニュートン的な時間である「近代的時間」の自明視へとつながっていることである。まずわれわれはこのことを、「空間論的転回」をめぐる学説史と、ローザら近年の社会理論家による見立てとに依拠することで論証した。

近代的時間を自明のものとして前提にした世界認識は、均質な時空間からなる「近代的 세계像」となる。われわれは大森荘蔵や野家啓一、若林幹夫の議論をたよりに、近代的 세계像を以下二つの特徴をもつものとして規定した。

近代的 세계像の第一の特徴は、それがパースペクティブ性をもたない超越的視点から俯瞰された「地図的」な世界の像だということにある（谷 1984: 227; 若林 [1995] 2008; 野家 [1996] 2005）。近代的 세계像は、大森荘蔵が「物体世界」と呼ぶような性質、すなわち「物体世界は無視点で知性的に思考される半神的世界把握」（大森 [1985] 1998: 296）であるという性質をもつのである。

また近代的 세계像の第二の特徴は、その「見えるものしか見ない」（若林 [1995] 2008）という性質に求めることができる。近代的 세계像の中では、計測という科学的な手法をつうじて理解可能なものが「見えるもの」の側に置かれ、それ以外のもの、たとえば靈魂や想像上の事物などが「見えないもの」の側に置かれる。このような区別のもと、「見えるもの」をすべてそのうちに含むことに、近代的 세계像の第二の特徴はある。

これら二つの特徴により、近代的 세계像は第一に時間的超越としての過去と未来、そして第二に空間的超越としての他者を、十分にはそのうちに含まない。われわれはこれらを、時間的超越に関しては野家啓一の「歴史の側面図」批判を、空間的超越に関してはメルロ＝ポンティの「上空飛行的思考」を援用することで示した（野家 [1996] 2005; Merleau-Ponty 1964= 1989）。

以上を背景とした上で、本論文の目的は、この問題を解決するために、近代的 세계像とは別様の世界認識の可能性を、近代的時間とは別様の時間を探究することによって呈示することにある。こうした問題設定のもとに、第一部では時間の社会学の諸研究に依拠しながら近代的時間の対象化を行った。また第二部ではアルフレッド・シュッツに依拠しながら、彼の現象学な時間論を「垂直に積み重なる時間」（野家 [1996] 2005）として解明し、それにもとづく 세계像の析出を目指してきた。

言い換えれば本論文が目指すのは、シュッツの時間論を時間の社会学に位置づけることを通して社会学的時間論を展開し、その意義を社会学の認識論の展開に求めるということ

である。G. ゼーバルトによれば、「シュッツの社会理論の真の貢献は、時間の概念を社会理論の中に、中心的でかつ根本的なものとして導入したこと」（Sebald 2015: 149）にあり、L. ミュゼットによれば「シュッツほど時間を突出した位置に置いた社会学者はいない」（Muzzetto 2006: 5）。にもかかわらず、「シュッツの時間論は、彼のなした仕事を受容されていくなかでむしろ等閑視されてきた」（Sebald 2015: 149）。A. ナセヒがシュッツを「現象学的思考様式の囚人（Gefangener）」（Nassehi 1993: 110）と捉えていることに端的に見て取れるように、このシュッツの時間論の社会理論および時間の社会学における等閑視の理由は、彼の時間論の現象学的な性格に求められうる。だがわれわれの観点からすれば、シュッツの時間論の現象学的な性格を徹底することによってはじめて、時間の社会学および社会理論に資するものとしてシュッツの時間論をアクチュアライズすることが可能である。このような発想のもと、われわれは研究を行ってきた。

第1部 「近代的時間」の社会学的研究

第1章 「時間の社会学」の歴史的展開

まず第一章では、既存の「時間の社会学（Zeitsoziologie）」（Bergmann 1983）の諸研究を、それらが近代的時間をどのように主題化してきたのかという点から検討した。この背景には、近年欧米圏で精力的に研究がなされている時間の社会学が、我が国には十分には紹介されていないという現状認識がある。

その結果明らかになったのは第一に、時間の社会学の学説史の概要である。具体的に言えば、時間の社会学は、デュルケームの『宗教生活の基本形態』（Durkheim 1912= 2014）に端的に見てとることができるような「近代的時間以外の別の時間性の探究」という問題設定を長らくとった後、一九七〇年代以降に近代的時間そのものの対象化に着手したということである。

また第二に、近代的時間に対する時間の社会学の基本的なパースペクティブが明らかになった。すなわち一九七〇年代以降、時間の社会学は近代的時間を「計量可能性」「抽象性」「直線性」の三つの性格のもとに把握してきたということである。しかしながら同時に、時間の社会学は、ローザの述べるように研究の断片化という問題を伴っていることも明らかになった。この問題に対してわれわれは、真木の四象限図式がその解決に資する枠組みとなりうることを示唆した。

第2章 近代的時間の変容—ハルトムート・ローザの加速化論

第二章は、近代的時間が現代社会においてどのように変容しているのかということを明らかにするために費やされた。ここではハルトムート・ローザの『加速化』（Rosa 2005）を集中的に検討することによって、現代社会とは時間の形状の上での「直線性」が弱まっている社会であり、またその一方で時間が急速に過去へと「流れ去る」性格が強くなっている社会であることが明らかになった。

この知見をふまえ、われわれは本論文第一章で提示した「計量可能性」「抽象性」「直線性」の三つの性格をもつものとして近代的時間を捉える視座を修正した。より詳しく言えば、われわれは第一章では他の多くの時間の社会学とともに、「直線性」という性格のうちに、時間が直線として観念されるという意味での形状の上での直線性と、時間が川のように流れ去るという性格の二つを込めていた。だが本章の考察により、近代的時間の現代の変容を十全に捉えるためには、両者は区別されなければならないことが明らかになった。そのため本章を経て、近代的時間とは「計量可能性」「抽象性」「直線性」「流れ去る性質」の四つの性格からなるものであること、そしてその現代の変容を捉えるためには、特に「流れ去る性質」に着目する必要があることが明らかになった。要するに本章では、いわば初期近代の近代的時間と後期近代の近代的時間との差異が明らかになり、後期近代の近代的時間の特徴として「流れ去る性質」が析出されたのである。

第3章 真木悠介の近代的時間批判—もう一つの時間の比較社会学

第三章では、真木の時間論に着目し、それを内在的に展開することを試みた。具体的に言えば本章の成果は、『時間の比較社会学』（真木 [1981] 2012）と『宮沢賢治』（見田 [1984] 2012）を突き合わせて読むことで、次の点を明らかにしたことである。すなわち、真木の比較社会的な時間論は、近代と非近代とを比較し「生きられる共時性」のもとに近代的時間を批判する「横の比較社会学」ではなく、近代と非近代の双方を含む顕在的な「世界」とそれらの基層に位置する潜在的な〈世界〉とを比較し「累積する時間」のもとに近代的時間を批判する「縦の比較社会学」として読まれることで、はじめてその批判的潜勢力を最大化されうることである。

第4章 第一部の結びにかえて—「流れ」のメタファーの問題

第四章では、第一部の議論をまとめ、第二部の議論への足がかりを設定した。本論文が第一部で検討したそれぞれの時間論は、それぞれに目的が異なる。こうした違いをイレリヴァントなものとし、第一部の議論を一本の線で結ぶことが、ここで目指されたことであ

る。

本論文は第一部において、第一章での時間の社会学の検討を経て、第二章でローザに依拠しながら近代的時間の現代的特性である「流れ去る」性質の強化に光を当て、そして第三章で真木の時間論を流れ去る時間の病理に対抗するために積み重なる時間を要請する理論として再構成してきた。この行論から見えてくるのは、時間の「流れ去る」性質こそが、近代的時間を対象化しその「磁場」を画定することを目指す時間の社会学が取り組むべきもっとも重要な主題だということ、そしてそのためには、真木が示したように、積み重なる時間性に依拠する必要があるということである。

第2部 「垂直に積み重なる時間」の社会的・現象学的研究

第5章 シュッツ社会理論における時間論の位置づけ

次に第二部では、シュッツの時間論に依拠しながら、近代的時間とは別様の「垂直に積み重なる時間」の析出と、それにもとづく世界認識の可能性について探求した。

第五章では、シュッツの時間論と社会理論との関係について考察した。両者の関係は、彼の時間論が『意味構成』（Schütz [1932] 2004= 2006）第二章の現象学的還元領野の分析で析出されたものであるという事情から、現象学的還元領野の分析と現世的領野の分析とのあいだの関係として、したがって『意味構成』第二章と第三章との関係として考えることができる。そのため本章では、『意味構成』第二章と第三章との関係を、これについてわれわれとは異なった読みを行っている先行研究（廣松 1991; 西原 1998; 2003）を導きの糸としながら考察した。

その結果明らかになったのは、『意味構成』第二章が第三章を基礎づける関係にあるということ、したがってシュッツの時間論は、彼の社会理論を基礎づける関係にあるということである。この作業は、垂直に積み重なる時間にもとづく世界像を呈示するという本論文第二部の目的を果たすための準備作業として位置づけられる。

第6章 シュッツにおける「垂直に積み重なる時間」

第六章では、シュッツの時間論を「垂直に積み重なる時間」という語のもとに捉え、それを過去・現在・未来の時制ごとに研究した。

その結果明らかになったのは第一に、「把持」および「沈殿」概念をもとに描かれる「垂直に積み重なる時間」における過去は、彼が各私的な経験の沈殿物としての「主観的な知識集積」とは区別して、いわば経験の社会的な沈殿物としての「社会的な知識集積」とい

う概念を呈示していることから分かるように、社会的な性格をもつものとして、したがって私には到達しえない「歴史」の領域へも伸び広がるものとして、描かれていることである。

また第二に、「予持」概念をもとに描かれる「垂直に積み重なる時間における未来」は、〈既知の一樣態としての未来〉という「規定可能な未規定性」の性格のもとに描かれる未来と、不意打ち的に到来する〈非知の未来〉という二種類のものとして描かれうるということである。これらの過去および未来の特徴づけは、同じく積み重なる時間性に目を向けていると言えるブルデューのハビトゥス論よりも広い射程の過去および未来を捉えうるという点で意義をもつと言える。

そして第三に「垂直に積み重なる時間」における現在、一方で過去と未来によって支えられながら、他方で過去と未来を規定するという性格をもち、したがってシュッツにおける現在と過去および未来との関係は「相互基づけ関係」と呼びうる。これにより、シュッツの時間論は、ブルデュー的な「過去中心主義」的時間把握と、ミード的な「現在中心主義」的時間把握の双方をその射程に含むものだということが明らかになった。

第7章 シュッツにおける社会的世界の時間的構成

第七章では、シュッツが『意味構成』第四章で呈示した社会的世界論を「垂直に積み重なる時間」にもとづいて再構成することを試みた。シュッツの社会的世界論は、客観的時間を共に構成する「再想起」および「予期」という対象的志向性を起点に把握すれば、近代的世界像をエゴロジカルな視点から捉え直したものとして理解されうる。すなわち、客観的時間における未来に「後続者の世界」があり、過去に「先行者の世界」があり、そして現在に「同時代者の世界」がある——そして、こうした世界の広がり、自己は共在者の世界の「今このように」から捉えている、というのが通常の社会的世界論の理解である。だが「垂直に積み重なる時間」をなす「把持」および「予持」という地平的志向性にもとづいて把握すれば、それとは異なった像を結ぶことになる。後者の点を強調しながらシュッツの社会的世界論を読み直すことに、本章の目的はある。

検討を進めた結果、地平的志向性を強調しながら社会的世界論を再構成することにより、現在の「共在者の世界」での経験は、一方で把持によって「同時代者の世界」および「先行者の世界」へと、他方で予持によって「後続者の世界」へと、つねにすでに結びついていてという性格をもつということ、しかも把持および予持は現在化作用である以上、同時代者の世界、先行者の世界、後続者の世界は現在に地平的に宿っていると言うほかないということを示した。

結論

最後に結論部では、近代的時間にもとづく世界像と「垂直に積み重なる時間」にもとづく世界像とを比較し、後者の特性を、過去の他者と未来の他者がそのなかでは現在しているという点に求めた。そして本論文の結論として、「垂直に積み重なる時間」にもとづく世界像とは、「マッハの自画像」の白紙の部分に、過去の他者と未来の他者を書き込んだものだということを示した。

本論文の成果としては次のものが挙げられる。まず強調しておかねばならないのは、現在には過去の他者と未来の他者が現在しているという命題は、SF やファンタジーなどの虚構や、あるいは宗教に関わるような命題では決してないということである。むしろ上の命題は、われわれが科学的な手続きを踏みながら導出してきた科学的命題である。そもそも本論文が問題にしてきたのは、上述のような命題を「非科学的」なものとして片づけてしまう近代的世界像の「科学的」な性格に他ならない。したがって本論文の成果は第一に、均質な時空間上に展開される世界像を問題としてとりあげ、それが唯一の世界像ではないということを示し、さらに過去と未来が現在するという別様の世界像のあり方を示唆したことにある。これは科学による世界認識のいわば時間的・空間的前提に関わる本論文の意義である。

また社会学および社会理論研究における本研究の意義として以下四点が挙げられる。第一に、「過去」「死」「未来」「他者」といった超越に関する問題系を問い直すための視座を、時間論の観点から提供したことである。序論で述べた通り、近代的世界像はこれらの問題系をそのうちから捨象する性質をもつ。これに対して本論文は、超越に関する問題系は「垂直に積み重なる時間」に依拠したパースペクティブからのみ十全に探究されうるという関心から、このパースペクティブを精緻化してきた。超越に関する問題系を問い直すことが近年の社会学の傾向の一つであれば、こうした問い直しの試みは、その根底にある近代的世界像および近代的時間に対する対象化と、「垂直に積み重なる時間」の精緻化を経てはじめて、徹底的に遂行されうるだろう。そのための基礎を提示したことに、本論文の社会学および社会理論研究における意義がある。

本論文の第二の意義は、「時間の社会学」という近年特に欧米圏で隆盛しつつあるがしかし我が国にはさほど十分には知られていない分野の諸研究を限定的な視角からではあるが整理し、紹介したことに求められる。ローザの言うように、徹底的な「時代診断（ZeitDiagnosen）」は同時に「時間診断（Zeit-Diagnosen）」でなければならないのであれば（Rosa 2005: 38）、時間の研究は我が国の社会学研究にとっても考慮に入れなければな

らない重要な問題だということになる。この点で、時間の社会学を紹介したことに本論文の意義はある。

第三に、「垂直に積み重なる時間」に光を当てたことに、本論文の意義はある。時間の社会学的研究はすでに数多くなされているが、たとえばハビトゥス論や記憶論など、時間の「積み重なる」性質を前提とする議論はあれど、その性質そのものに集中的な探究の光を当てた議論は必ずしも多くない。しかしながら、たとえばプルーストの無意識的記憶や、カストロフィに遭遇した人に関して報告される「時が止まる」事態など、それを十全に捉えるためには積み重なる時間のカテゴリを視野に入れなければならないケースも想定される。なによりも、人間の経験の「社会的」な性格を十全に捉えることを目指すいかなる試みも、現に生きている人びと同士が織りなすいわば横の社会関係だけでなく、現在が過去や未来の他者といかに繋がっているかといういわば縦の社会関係に目を向けずには済まされない。こうした事態を射程に入れるための理論的な装置として、「垂直に積み重なる時間」を取り出したことに、本研究の意義を求めることができる。

そして第四に、社会学が近代的時間批判を行うための枠組みを精緻化したことが挙げられる。本論文は、対象化的な社会的世界と地平的な社会的世界との関係を主題化することで、地平の世界に依拠して対象化的な社会的世界を批判する理路を立てうる。こうした理路は、ともすれば「ロマン主義的」にならざるをえない近代的時間批判に、新しい道筋を与えることが可能である。ラッセルは、直線的時間についての既存の批判を検討していく中で次のような結論に達している。すなわち、時間批判をする試みは多くの場合、非近代社会の時間を引き合いに出すという論法をとっていることである（Russel 2002）。第一部で検討した真木悠介も、「時間のニヒリズム」批判の根拠としての「生きられる共時性」を、自ら近代化以前の社会として位置づけるメキシコをモデルに彫琢している。このように、多くの場合批判的な志向をもった時間論は、近代にあっては失われた非近代社会の時間性を持ち出すことで、時間批判を遂行しているのである。だが、すでに本論文第三章で示したように、このような批判の試みは、われわれは近代から逃れることはできないという事実直面した時に立ち止まるほかない。したがって、近代的時間を批判しようとするれば、われわれは近代の中に、それに対する批判の根拠を探し求める必要がある。このように時間論の文脈を描けば、シュッツの「垂直に積み重なる時間」は、それが近代という日常生活世界を生きる人びとの経験に定位した視点から彫琢されたものであるという事情によって、近代の中で近代的時間を批判しようとする時間論の試みに、基礎を提供してくれるはずである。

事実、このように対象化的な社会的世界とその基底にある地平的な社会的世界という構

図を描いた時、われわれは第一部で見た真木悠介の近代的時間批判を、この構図によって補完することができる。われわれは本論文第三章にて真木の試みを、顕在的な「世界」の基底にある〈世界〉に位置する〈天空の地質学〉によって近代的時間を批判するものとして定式化した。この定式化からすれば、第二部でわれわれがシュッツに依拠しながら描いた地平的な社会的世界を、〈世界〉に重なるものとして位置づけることができる。地平的な社会的世界も〈世界〉も、そこには積み重なる時間性が属し、また近代的な世界の基底にあるという共通点をもっているからである。すると真木のもう一つの近代的時間批判は、現象学的な分析によって補完されうるということが言えるだろう。

次に本論文のシュッツ研究における意義として、次の二点が挙げられる。第一に、シュッツの仕事を、現象学に由来する「垂直に積み重なる時間」を社会学に導入したものとして読んだ上で、時間の社会学の学説史に位置づけたことにある。ナセヒの理解の仕方に見られるように、シュッツが「現象学的思考様式の囚人」(Nassehi 1993: 110)であるという理解は、時間の社会学研究においてシュッツの仕事を評価することの妨げとなってきたと考えられる。これに対して本論文は、むしろシュッツの議論の現象学的な性格を徹底することによってこそ今日の社会学に資する知見が導出されうるという考えのもと、シュッツの仕事を捉え直してきた。これにより、本論文はシュッツの現象学的な時間論をアクチュアルな社会的時間論として位置づけたという意義を有する。

また第二に、本論文の意義は、内在的視点をとる理論としてのシュッツ社会理論の特徴を強調したことにある。上空飛行的思考をとりやめ、内在的視点から社会的思考を遂行することが今日の社会理論の課題の一つであるならば(佐藤 2011; 盛山 2011)、まさしく世界に内在した立場から発されたシュッツの社会理論は、この課題の解決に資するきわめて有意義な枠組みとなるはずである。この点で、シュッツの社会理論の内在的な性格を強調してきた本論文は、シュッツの社会理論をアクチュアルな社会理論として位置づけたという意義をもつ。

だが本論文には多くの点で課題がある。ここでは三点、指摘しておきたい。

まず挙げなければならないのは、空間の問題である。近代的世界像の問題を十分に捉えるためには、時間だけでなく空間の問題を取り上げることが必要不可欠であるが、本論文では空間についてはほとんど議論ができていない。これについてはシュッツを起点に、現象学的な空間論と社会的な空間論を検討するといったさらなる研究が必要である。

また第二に、近代的世界像という本研究の出発点が、さらに精緻化される必要性が挙げられる。われわれはこの世界像を、本論文での探究に必要なかぎりで描き出したにすぎない。だがこの問題は、社会学や人文社会科学にとどまらない科学の全体に関わる大きな問

題であり、それゆえすでに様々な分野において先行研究があるだろう。今後は他分野の研究をも取り入れながら、この近代的世界像の問題をさらに精緻化していく必要がある。

第三に、本研究は社会理論をはじめとした他の社会学研究との関連づけがいまだ十分ではない。たとえば近代的世界像という本研究の出発点についても、では他の社会理論ないし社会学がどのようにそれを採用し、またどのようにそれを批判しているのかということの詳細に論究することができていない。この課題については、本論文の成果を個々の社会理論と突き合わせて検討することが今後必要になる。

以上で挙げたもののみならず、本論文には多くの点に課題がある。しかしながら、シュッツに依拠しながら「垂直に積み重なる時間」の概念を析出し、それにもとづいた世界像を、近代的世界像とは別様の世界像として呈示するという基本的な線だけは引くことができたと考えている。今後はこの線をさらに肉づけし補強しながら、積み残した問題に一つ一つ取り組んでいきたい。